

# 研究の基盤にある懐疑

私の主たる研究分野は、経営学、人的資源管理、労使関係論などです。22歳で大学院に入学し、27歳でこの高崎経済大学に専任講師として赴任して以来、ほぼ同じ領域の対象について実証研究を細々と積み重ねてきました。特筆すべき成果とてありませんが、「働くことの意味」を問い続けてきました。まだ学生だった頃から今日に至るまで、研究に立ち向かう姿勢の真奥には、つねに「現代」への批判と畏敬とが潜んでいました。

「現代」は失われた荒野であり、現代社会の不安の諸相と、現代人の知的危機の意識とは、その発端を、過去という記憶と資料との授けを借りなければならぬ世界に有しています。諸科学の進歩に追従し、あるいはそれらに対する課題の要求が強まれば強まるほど、われわれの生活はいよいよ惨めなものになり、「現代」の空はますます暗澹としてきます。人間が機械に隷属し、個人が集団や組織の中に解消せしめられる時代、そして「希望」という精神的営為すら生まれながらにして格差のある時代、かかる時代に空を仰ぐ者は、人類の文化に対して、自分がある精神的不安の血を受け継いでいることを感じとるに違いありません。

しかし、「現代」に立つ人間の運命について深く考えるならば、そこに人類の遺産と罪との伝承を認めることによって、荒野に生きているという暗い経験的世界の終末的な幻滅感から一条の光を掴みとることでしょう。何故ならば、それはいつの日かこの《生》に何らかの意義を与えずにはおかないからです。破滅からの脱出、滅びへの抗議は、われわれにとって自己の運命に対する反逆の意志であり、唯一の存在証明でもありません。

こうした意識は、私の研究の方向をつねに照射しています。近年、非正規雇用、格差、貧困化、遁走、社会保障の危機、金融市場危機などが社会問題となっていますが、その根源に自助・自己責任・競争・規制緩和などを推進してきた現代科学の現実からの乖離が潜んでいると思われます。百万人の人々が正しいとするものをまずは疑ってみることに、孤立を恐れず自ら考えてみることに、人間の補集合としての諸存在(宇宙とか生物とか非生命物質など)にも知の矛先を向けてみることなどが重要なのではないのでしょうか。

## 推薦図書

- H.A.サイモン『学者人生のモデル』安西祐一郎・安西徳子訳、岩波書店、1998年  
J.D.クランボルツ『その幸運は偶然ではないんです！～もうキャリアプランはいらない』  
花田光世他訳、ダイヤモンド社、2005年  
茂木一之編著『人間らしく働く～ティーセント・ワークへの扉』泉文堂、2008年  
茂木一之編著『創成期の人的資源管理～イギリス労務管理生成史論～』泉文堂、2009年



■日本の経営論  
■経営学史Ⅰ・Ⅱ

茂木 一之  
(もぎ かずゆき)

高崎経済大学教授、経営学博士(MDB)。主要著書に、『経営学入門』深林出版、『経営と管理～情報技術者のための経営学』深林出版、『講座労務管理』総合法令、『労働組合の機能と構造』PHP研究所、『労使協議制と経営参加』PHP研究所、『中小企業診断：体系キーワード辞典』同友館(上下)、『「新」マルチメディア時代を生きる知恵』中央経済社、『労務管理と診断』(改訂版)同友館、『労務管理生成史論』泉文堂など。